



相馬御風著

一茶と良寛と芭蕉

春秋社版

大正十四年十一月十五日 印刷  
大正十四年十一月二十日 發行  
大正十五年三月二十五日 二十版發行

【定價金壹圓八拾錢】

一茶と寛良と芭蕉

著作者

相馬御風

發行者

神田豐穂

印刷者

小島爲吉

印刷所

小島印刷所  
東京市小石川區初音町八番地  
東京市小石川區初音町八番地

發行所

東京市日本橋區數寄屋町一番地  
株式會社

春秋社

振替東京二四八六一番  
電話 大手二二四番

## 緒言

郷土に歸住してからこゝ十年ほどの間に私の書き溜めた隨筆を讀みかへして見て、その中に一茶、良寛、芭蕉——その三故人に關する文章の多いのに、私は自分ながら少々驚き氣味であつた。そして何といふことなしに、此の三故人について自分の書いたものだけを一卷に纏めて見たいやうな氣になつた。中には既刊の文集の中に收めて置いたものも四五篇はある。しかし、特に以上の三故人に關する文章だけをかうして一卷にまとめて見る爲にこゝに再び取り上げて見ることも必ずしも無意味で

ないといふ風に考へられたので、それも敢てすることにした。

無論最初から計畫を立てゝ書いたものでないから、重複もあれば撞着もあらうが、その代り書くために書いたといふやうなわざとらしさはない筈である。いはゞ三人の故人を話材にした爐邊の閑談といつたやうな埒もない無駄話である。

だが、總じて昔の人は此の閑談といふものを何よりも楽しんでらしい。

閑談を樂んだ故人について語るに吾等また閑談を以てする。そこにも必ずしも意義なしとは云へまい。高いところから講じたり、四角張つて論じたり、尤もらしく説いたりすべく、私達はあまりに物臭になりすぎた。

どうか私の此のつまらない一卷が、さうした打ち解け話を求められる

人々の、燈下徒然の閑談に一夜の相手とでもなり得るやうに、それ位が現在の私としてのせいぐの念願であ。

大正十四年晩秋越後糸魚川の陋居にて

相馬御風記

# 一茶と良寛と芭蕉 目次

野人一茶の悟	三
一茶の故郷を訪ふ記	五
一茶雑感	八
~~~~~	
良寛と大村光枝	一〇
良寛と大森求古	一三
良寛と由之	一四
良寛の妹妙現尼	一七
土佐で良寛と遇つた人	一八
良寛堂の建立	一九

目次

二

良寛の書の味……………	一八
良寛の肖像……………	一八九
良寛雜考……………	二〇四
~~~~~	
芭蕉と良寛……………	二四〇
芭蕉と壽貞尼、良寛と貞心尼……………	二六一
市振に於ける芭蕉の遺跡……………	二七六
孤獨な旅人……………	二八三
芭蕉と良寛についての雜感……………	二八六
生の寂味……………	三二四

以上



一茶と良寛と芭蕉



## 野人一茶の悟

○

焚くほどは風がもて來る落葉かな

これは良寛和尚の作であるとして、越後地方でひろく人口に膾炙してゐる句で、良寛の詩や歌を全く知らない人でも此句だけを知つてゐる人さへ少くない。良寛和尚が最もながく住んでゐた國上山くがやまの五合庵跡に先年此句を右に彫つて建てた人もあつた。一人の法師が落葉を焚いてゐる圖に此句を讀した富岡鐵齋筆の扇面が越後の某家に藏されてゐるのを私は見たこともある。

此の句について私は嘗てこんな風に述べたことがある。

「焚くほどは風がもてくる落葉かな——いかにも此の句には明るい、安らかな自足の心が現されてゐる。しかし、それは好い加減な心の持ちやうで、味ふことの出來るやうな安價な自足ではな

い。それは世間にざらにあるやうな自棄的な樂天ではない。それは大自然に對する此上ない謙虛な心を持つたものでなければ到底眞に味ふことの出来ない尊い安らかさである。そこには聊かたりとも貪る心の曇があつてはならない。露ほどの自負も、はからひも、思わくもあつてはならない。一切を打ちまかせた心である。あらゆるものに感謝する心である。ひねくれずに天地の恵にあづかり得る心である。それは要するに良寛和尚ほどの人にして始めて安んじて吐き得る句である。私達のやうな心の到らない者が、好い加減な氣持で同じたりすると、それは却て怖ろしい邪見に陥らずにゐられないのである。』

なほ私はそれについてこんなやうなことをも書いたことがあつた。それは或人からそれに甚だよく似た句が加賀の千代にあるといふことを教へられたからである。

「落葉とて風のものや持歩く——これは「焚くほどは風がもて来る落葉かな」の句が良寛の自作ではなくて、加賀の千代の句だといふがどうかと人にたづねられたについて調べて貰つた結果見出された千代尼の句である。落葉とて風のものや持ち歩く——これは又何といふ女らしい思わくの現はされた句であらう。これには棄てゝも棄て切れない悲しみが訴へられてゐる。何もの

かを得んとして、つひに何物をも得る能はざる果敢なさが訴へられてゐる。奪はれはせぬか取られはせぬかといふやうな絶間なき不安が訴へられてゐる。之れを良寛の「焚くほどは」の句と比べて見ると、兩者の相異のあまりに甚しいのに寧ろ驚かれずに居られぬのである。

「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水——これも千代の有名な句である。自分の庭の釣瓶に朝顔の蔓がからんでゐる。それを見て、その風情のあまりのしほらしさに動かされた彼女は、それをそのままにして置いて、自分は隣家の井戸へ水を貰ひに行くことにした。いかにも此の句にはさういつたやうなかよわいものを憐むと共に、自然の生命を尊び自然の美しさを愛するつゝましやかな、温かな、そして美しい心が現はされてゐる。此の句が弘く人口に膾炙したのは尤もな事であるとも思はれる。しかも、一步退いて此の句を見直す時、私はその「釣瓶とられて」といふ表現に少からぬ物足らなさを感じないでは居られぬのである。「とられて」といふ感じ方にはあまりに思わくがあり過ぎる。「とられて」とまで感じたからには、興へることそのことが既に自然でない。此の句がどこかに自然さ、純真さを缺いてゐるのは、さうしたところから來てゐるのかも知れない。此の句は實際の經驗を歌つたものであるかも知れぬが、幾度もよみ返してゐると、何となく

それは拵へられた句であるやうに感じられてならぬのは、やはりさうしたところから來るのであらう。どこかにわざとらしさがある。見せびらかしのやうなところさへある。純真味が溢れてゐない。實感にとほしい。本當に楽しんでゐるところがない。』

このやうなわけで、私は「焚くほどは風がもて來る落葉かな」の句が加賀の千代でないかといふ疑を打ち消すことが出來た。「木の葉まで風のものや持歩く」とか、「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」とかいつたやうな心境から、どうして「焚くほどは……」といふやうな句が生れて來よう。そんな風に私は「焚くほどは……」の句が千代でないかといふ人からの注意によつて、それがたゞ千代の作でないといふことを知り得たばかりでなく、その兩者の間に認められた心の進りの階段の高低といつたやうなものによつて、豫期しなかつた貴い暗示を與へられたことを、寧ろ有りがたいことに思つたのであつた。

それにしても、私の心にはいつからと、つきりわからなかつたが、かの「焚くほどは……」の句についての一つの漠然とした疑問が存してゐる。それはこの句に現はされた心持はいかにも良寛でなくてはと思はれるにも拘らず、しかもなほどこか知ら良寛らしくない感じのすることであ

つた。といふのは、おそらく其の句が良寛の自作でないといふ説が世間の一部にあることに暗示を與へられたからでもあらうが、そればかりでなく私にはその句をどこ／＼までも良寛和尚の自作であると主張しかねる二三の理由があつたからである。その一つは此の句が良寛の代表作であるかの如く世間で言ひはやしてゐるにも拘らず、私自身今日までの調査を以てしてなほ且眞にこれが良寛の眞筆であると信ずるに足る此の句を書いたものを見ないことであり、二つには良寛に最も近く接してゐた彼の愛弟子貞心尼の集めた良寛遺詠の中にもかくまで名高い此の句の收められてゐないことであつた。しかし、さうしたとよりも何よりも、此の句の表現に、とりわけ此の句の調子に、良寛のそれとしてはあまり氣輕すぎるやうなところのあるとが、私には物足らなかつたのである。

けれども、以上のやうな漠然たる感じだけを根據として世間に弘く信じられてゐる口碑の虛妄を説破することは、私にはなほ出来ないことであつた。況んや、前にも述べたやうに此の句に現はされた心持には私はひどく動かされるところがあつたに於てをやである。

○

楠木は松平のひりぬき屋の住

野人一茶の傳

八

ところが、今年の一月埼玉縣本庄町の田島福重氏といふ未知の人から受取つた一通の手紙は、さうした私の心の曖昧さに思ひがけない一道の光明を與へてくれたのであつた。

田島氏の手紙によると、同氏は最近一茶の『七番日記』を讀んでゐるうちに、圖らずも文化十二年十月の條で、

焚くほどは風がくれたる落葉かな

といふ句に出遇つて驚いたが、一體これは一茶自身の作であるのか、それとも一茶が當時人口に膾炙してゐた良寛の句を記憶に浮ぶまゝに何氣なく他の自作の落葉の句と並べて書き込んだものであるか、それについての私の考をも聞きたいとのことであつた。

しかも、なほそれに書き添へて、田島氏は更に次のやうな句の一茶にあることをも教へてくれたのであつた。

木の葉かくすべをもしらで年とりぬ

入程は手でかいて來る木の葉かな

前者は『七番日記』文化十三年十月、後者は同文化十五年十月の條にあるのであつた。



これは私にとりては、大きな驚きであつたと同時に、一つの大きな安心でもあつた。「やつとわかつた！」といふやうな安心と、「たうとうわかつた！」といふやうな満足とに、私は奥歯にはさまつてゐた物がとれたやうなすが／＼しさを感じた。更にそれにつゞいて私の心には、

「なるほど、一茶の句であつたのか。」

といふ肯づきと、

「一茶にもかうした句があつたとは？」

といふ驚異に近い一種の感じとが動かすにはゐなかつたのである。

ところで、いよ／＼かの「焚くほどは……」の句を俳諧寺一茶の作だとして考へ直して見ると、私には又別趣の感想がつぎ／＼に湧き起つて來るのであつた。一茶の『七番日記』は嘗て私も二三回繰り返し讀んだことがあるにも拘らず、つひに私はその句に心を留めずに過ぎてしまつた。いや、『七番日記』を讀んだ人は世間にはかなり多數あることであらう。また私達が良寛についてやつてゐるやうに、寧ろそれ以上に深くこまかく廣く一茶の生活なり藝術なりについての研究に努めてゐる人も世上に少からずある。而も私はつひ今日までかの「焚くほどは……」の句の一茶